

中学校国語科における報告を書く学習指導の研究

A Study of the learning instruction to writing a paper in junior high school Japanese classrooms

長谷川 祥子
Sachiko HASEGAWA

1 「読解力」は報告の文章を書くことで向上する

国語学力は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」という3観点の評価についての学習の成果、と捉えることができる。「読解力」を「思考・判断・表現」の中の「読む力」と広く捉え、文学的文章を読む力と論理的文章を読む力とに分けると、学習内容の全体像が明確になる。

2019年12月の報告されたPISA2018の結果によると、「読解力」は前回（2015年度）より平均得点・順位が有意に低下し、自分の考えを「根拠を示して説明することに、引き続き、課題がある」と示されている。これまでも中・高等学校国語科授業で論理的文章を読む学習が不足していると考えている。これらを補う学習とし、論理的文章を「書く」ための「読む」学習を提案した⁽¹⁾。

新井紀子（2018）が自力で開発した、RST（リーディングスキルテスト）は六つの分野で構成されている。次に各分野でのA Iの成果を簡潔に示す⁽²⁾。

- (1) 係り受け—A Iの正解率が80%を超える。
- (2) 照応—急速に研究が進んでいる。
- (3) 同義文判定—A Iにはまだまだ難しい。
- (4) 推論
- (5) イメージ同定
- (6) 具体例同定（辞書・数学）—A Iでは全く歯が立たない。

RSTは「A Iに読解力」をつける研究が開発しているため、「人間の基礎的読解力」は部分的な測定となる。RSTの例題をみるかぎり、演繹論理の思考力を判断することができる。

論理的思考には演繹論理と帰納論理の二つの型がある。日常生活の推論は帰納論理が中心である。天気予報や地震の予知の場合、過去の経験の類推で予測される性格が強い⁽³⁾。自然科学の知識は過去の経験を一般化したもので、帰納論理を基礎にしている。

帰納論理の思考力を伸ばす際、報告の文章指導が効果的であると仮定している。報告の文章指導は、「読解力」向上の一助になるのではないかと考えている。

2 研究の目的

本稿は「1」で述べた課題から、中学生が学校生活で記述する機会の多い、報告の文章を書く学習指導を対象とする。論理的文章の文体や、報告の文章の変遷を確認した後、中学生の書いた報告の文章の移り変わりを検討する。それらから、報告の文章評価の学年進行における観点の変化を考察し、中学校国語科における報告の学習指導を提案することを目指すものである。

3 研究の方法

研究の方法として、次の3点を設定している。

- (1) 論理的文章の文体や、報告の文章の変遷を確認する。
- (2) 生徒の報告の文章の移り変わりを検討する。
- (3) 報告の文章評価が学年進行において、観点が変化することを考察する。

4 文体と個性

(1) 文学の文体

文章には個性がつきものである。精緻に考える人は緻密な文章を書き、雑に考える人は粗い文章を、情熱的な人は力のこもった文章を、冷静な人は淡々と書くといわれる。優れた文章には確立した文体があり、それが個性の始まりである。

柳父章(2004)は夏目漱石の「吾輩は猫である」の文体を次のように述べている⁽⁴⁾。

大日本帝国憲法が出現し、法律文や学術論文などに「～ハ」文体が盛んに登場し始めたその同じ頃、小説家、夏目漱石は、この文体を風刺した文章(注「吾輩は猫である」)を書いていた。(中略)少数の知識人や学生にとっては斬新ハイカラな響きがあったに違いない。そして同時に、多数庶民にとっては、高級で、一種近づきたい語感の言い方だったろう。しかもこの小説の冒頭で、猫がそう発言している。そのズッコケたおかしさは、これから始まる小説の予感であり、小説の雰囲気をも伝えていた。

柳父が言及したとおり「吾輩は猫である」は猫や作中人物が「～ハ」文体を使い、それらを含め作品が社会批判や風刺となり、「ズッコケたおかしさ」やユーモアを生み出している。柳父は初期の漱石作品の本質を的確に論じている。

一方、今野真二(2015)は森鷗外の「山椒大夫」を次のように評している⁽⁵⁾。

……精密に構築された論理を展開する文章は文学作品にも論説にも使うことができる文章として、(大正期の)散文の典範となったとの指摘もある。(中略)現代日本語とあまり「距離」を感じさせない文章であり、そうした意味合いにおいては、現代日本語の「書きことば」の源流

をこのあたりの時期に求めることができると思われる。

「山椒大夫」をはじめ「興津弥五右衛門の遺書」「最後の一句」「高瀬舟」といった歴史小説は「精密に構築された論理を展開する文章」が大部分を占める。「精密に構築された論理」の展開は作品の冒頭にあり、昔話の語りに類似している。それを次に「高瀬舟」の冒頭で確認する⁽⁶⁾。

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心で、此同心は罪人の親類の中で、主だつた一人を、大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた黙許であつた。

上記では高瀬舟、罪人の護送、同心の役割、親類の同船許可の慣例といった、作品の舞台を支える設定を網羅しながら短く語られている。ドイツ文学を熟知していた鷗外が、グリム童話等の伝承物語の語りという、簡潔な文体を利用したと考えられる。

今野は1915（大正4）年に発表された森鷗外の「山椒大夫」、芥川龍之介の「羅生門」、漱石の「道草」について、「同時代の作品であるという観点から、それぞれの作品をかたちづくっている日本語のあり方を観察するといった試みもおもしろい」⁽⁷⁾という。続けて、そうした試みは「文学研究においては、もちろんのこと、日本語学研究においてもなされないように思われる」と論じている。「日本語のあり方」とは文体と置き換えることができ、今野は文学の文体研究の現状を示したと理解することができる。

(2) 論理的文章の文体

文学に限らず、論文も優れた文章には確立した文体が存在する。明治の文豪の論文をはじめとし、それらを考察する。

① 森鷗外の論文

森鷗外の『衛生新篇』⁽⁸⁾について、石田頼房（1999）は「医学、なかでも公衆衛生に関する活発な活動を展開」し、「最も戦闘的な啓蒙活動をしたのが都市論の分野であった」⁽⁹⁾としている。鷗外は都市計画に関し豊富な知識と的確な見解とを備えている。『衛生新篇』の「都市」から「新街造設ノ計画」⁽⁸⁾を中心に引用する。

都鄙人工ノ疎密ハ大懸隔アリ日本全領土ノ本籍人工六六二五五七七八人（明治四十二年）ヲ土地面積（七四二三方里四七即一一四三一平方吉米四四）ニ配スルトキハ每一平方吉米五七九人六一トナリ東京府（東京市ハ統計年鑑ニ面積ヲ載セズ）ノ現在人工三〇五三九四六人（明治四十二年）ヲ土地面積（一三八方里六七即二一三五平方吉米五二）ニ配スルトキハ每一平方吉米一三八三人二四ナル独逸ハ（中略）柏林市ハ每一平方吉米三二六六五人トス（中略）

都住者ハ之ヲ村居者ニ比シテ不健康ナルコトハ古ヨリ人ノ伝唱スル所ナリキ都人ハ概ネ面色蒼白、筋骨薄弱、輕佻浮華、力役ニ堪ヘ難ク、村民ハ之ニ反シ（中略）

都会ハ活物ナリ日ニ月ニ發育ス故ニ当局者ハ予め新街造設ノ案ヲ定メ其図ヲ制ス独逸ハ自治

団体ヲシテ個人ノ権限ヲ侵シテ造屋ノ並列線ヲ画一ニスルコトヲ得シムルコト既ニ久シ英吉利ノ如キハ之ニ反シ一九一〇年始テTown planning billヲ制定シ公衙ヲシテ個人ノ造屋ニ容喙スルコトヲ得シメタリ是ヨリ先キ英人ハ其私有地区ニ於イテハ自在ニ街衢ヲ開通セシムルコトヲ得タリキ唯街幅ノ制限(四〇乃至五〇呎即一二、一九乃至一五、二四米)ヲ守ルコトヲ要セシノミ

新街造設ノ立案ニ参与スル者ハ一、土工家Ingenieur又測地家Geometer二、理財家Nationaloekonom,Volkswirt (中略)

造設ノ大体ヨリ論ズレバ先ヅ居住区Wohnbezirkト工業区Industrieviertelトヲ限画シ公園oeffentliche Parkanlage及遊戯場Spielplaetzeヲ存置セザルベカラズ(後略)

段落ごとに一つの事例が明確に示されている名文である。引用の第一段落の「都鄙人工ノ疎密ハ大懸隔」、第二段落「都住者ハ之ヲ村居者ニ比シテ不健康」、第三段落「都会ハ活物」、第四段落「新街造設ノ立案ニ参与スル者」、第五段落「造設ノ大体」という傍線がキーワードとなり、段落の冒頭に置かれている。一つの形式段落に一事項を記述するという形式が厳密に守られている。原文では段落の冒頭は一字下げになっているが、句点(「。」)が付されていない。

また、第一段落は「都鄙人口ノ疎密」を立証するために、日本・東京、ドイツ・ベルリンという二例を典型として置き、数字を効果的に使っている。無駄な文言のない簡潔で明瞭な文体である。

② 夏目漱石の論文

夏目漱石は『文学評論』で「スキフト」¹⁰⁾を次のように論じている。

これによつて見ると、スキフトの想像力について吾人の感心すべき点は二つある。一は其奇抜にして常人の夢にも想ひ及ばざる境地を拉し来る事である。今の人の眼から見れば慣れ切つて陳腐の極に見えるけれども、六時にも足らざる人間が生息してゐる世界を想像するのは奇抜である。(中略)

二には此奇抜なる想像を更に写實的に描き出す想像に感心する。前の丈なら或は吾々にでも考へ付けない事はない。然し考へ付いたところで、それを小人国らしく、又大人国らしく、又馬の世界らしく活かして来ると云ふ段になると到底叶はない。(中略)

まるで幾何学の講義を聞く様である。以上の諸例からしてスキフトの想像は詩的と云ふよりも寧ろ散文的だと云へる。散文的と云ふよりも寧ろ事實的だと云へる。事實的の極は遂に科学的になる。但し数学的に精密になるといふ丈の意味である。(後略)

漱石の論文は一つの段落が一事項から成り立ち、段落の役割も明確である。引用の第一、二段落で具体的事例が書かれ、キーワードである「其奇抜にして常人の夢にも想ひ及ばざる境地を拉し来る事」、「此奇抜なる想像を更に写實的に描き出す想像」が段落の初めの方に置かれ、一段落を構成している。具体的事例を記述した段落では「一・二」と数値が段落の初めの方に記述されており、数字番号をつけて論文を組み立てるという技術も確立している。

引用の第三段落は考察の役割を担い、前の第一、二段落に書かれた内容を要約し、共通する性質を示している。キーワードである「事實的の極は遂に科学的になる」が「スキフト」の「想像力」

に対する性質を端的に述べている。

漱石が論文の書き方を熟知していたことは小説と比較すると明らかになる。ほぼ同時代の作品「坊っちゃん」¹¹⁾を引用する。

ひゆうと風を切つて飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨へ中つたなと思つたら、後ろからも、背中を棒でどやした奴がある。教師の癖に出て居る、打て打てと云ふ声がある。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を投げろ。と云ふ声もする。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍に居た師範生の頭を張りつけてやつた。石が又ひゆうと来る。今度はおれの五分刈の頭を掠めて後ろの方へ飛んで行つた。山嵐はどうなつたか見えない。かうなつちや仕方がない。

「坊っちゃん」と生徒との喧嘩の場面である。喧嘩を止めに入つた「坊っちゃん」だが、「背中を棒でどや」されたことをきっかけに、自ら喧嘩に参入していく様子が、会話を中心に生き生きと描かれている。会話や行動描写、独り言が整然と組み立てられている。このように漱石は明らかに論理的文章と文学的文章とを書き分けており、それぞれの文体、用語等の役割を熟知していたといえる。

③ 寺田寅彦の論文

寺田寅彦（1878～1935年）は日常生活上の現象や物理学の理論等を、帰納論理の思考を使い平易な言葉で説明している。次に「地球の剛性に関する学説」¹²⁾を引用する。

……昨年から今年へかけてこれらの疑問に多少の光明を与えるような学説が二、三発表されたので、これを簡単に御紹介しておきたい。

第一には英国のエー・イー・エッチ・ラヴ氏のSome Problems of Geodynamicsと題した論文集である。その中で上述の問題に関する主要な点と思われるのは次の通りである。（中略）

第二は以前からこれらの問題の専門家として知られたドイツのシュワイダー氏の論文である。同氏は従来潮汐及び緯度変化に基づく計算の方法の欠点を指摘し、この修正を試みている。（中略）

次に最近に現われたのは京都理工科大学の志田教授の論文である。同氏は前総長菊池男爵の経営によって設立された上加茂の観測所において観測された水平振子の結果を纏めて有益な結果を発表されたのである。（中略）

以上の諸説を総合して考えると、地球全体平均の剛性はほぼ鋼鉄などの二倍ないし三倍半程度のものであるらしい。（後略）

第一段落に序論、第二、三、四段落に具体的事例、第五段落に考察を記述している。論文の構成が形式どおりで、一段落一事項の原則も守られている。また、形式段落と意味段落とが一致している論文である。三つの具体的事例と考察のキーワードである「地球全体平均の剛性はほぼ鋼鉄などの二倍ないし三倍半程度」がよく結びついている。

④ 丸山真男の論文

社会学者である丸山真男（1914～1996年）の文章は精緻である。高等学校国語教科書の教材に掲載されている「『である』ことと『する』こと」¹³⁾を次に挙げる。

徳川時代のような社会では大名であること、名主であることから、その人間がいかにかふるまうかという型がおのずと生まれてきます。したがって、こういう社会でコミュニケーションが成り立つためには、相手が何者であるのか、つまり侍か百姓か町人かが外部的に識別されることが第一の要件となります。(中略) 儒教道徳が典型的な「である」モラルであり、儒教が生んだ社会、また儒教的な道徳が人間関係のカナメと考えられている社会が、典型的な「である」社会だということを物語っております。(中略)

「である」論理から「する」論理への推移は、必ずしも人々が朝目ざめて突如ものの考え方を変えた結果ではありません。これは、生産性が高まり、交通が発達して社会関係が複雑多様になるにしたがって、家柄とか同族とかいった素性に基づく人間関係にかわって、何かをする目的で——その目的のかぎりでとり結ぶ関係や制度の比重が増えてゆくという社会過程の一つの側面にほかならないのです。近代社会を特徴づける社会学者のいわゆる機能集団——会社・政党・組合・教育団体など——の組織は本来的に「すること」の原理に基づいています。そうした団体の存在理由が、そもそもある特定の目的活動を離れては考えられないし、団体内部の地位や職層の分化も仕事の必要から生まれたものであるからです。封建社会の君主とちがって、会社の上役や団体のリーダーの「えらさ」は上役であることから発するものでなくて、どこまでも彼の業績が価値を判断する基準となるわけです。(中略)

こういう例でおわかりになりますように、(中略) そういう領域による落差、また、同じ領域での組織の論理と、その組織を現実にかしている人々のモラルのくいちがいということからして、同じ近代社会といってもさまざまなヴァリエーションが生まれて来るわけです。

「である」社会の典型として「徳川時代のような社会」、「である」道徳に「儒教道徳」を挙げている。これに対し、「する」社会の例では「機能集団の組織」を、「する」道徳で「公共道徳」を示している。さらに、価値を判断する基準は「である」社会で「外部」、「する」社会で「業績」と、対置させている。具体的事例の選択が確かで、鮮やかである。典型的な例が提示されているため、「同じ近代社会といってもさまざまなヴァリエーションが生まれて来る」という考察が納得できる。

⑤ 森嶋通夫の論文

経済学者の森嶋通夫(1923～2004年)の『なぜ日本は没落するか』から「私の方法論」の冒頭と結末を示す^[4]。

一九九八年の現時点で二〇五〇年の日本の状態を予測するということは、時間的には一九二九年——ニューヨーク株式が大暴落して世界大恐慌が始まった年——に一九八一年を予測するのと同じことである。(中略)

このような社会の動きを、人口という土台の動きから導きだす思考は、人口史観と呼んで差し支えないであろう。人口史観で一番重要な役割を演じるのは、経済学ではなく教育学である。そして人口の量的、質的構成が決定されるならば、そのような人口でどのような経済を営み得るかを考えることが出来る。土台の質が悪ければ、経済の効率も悪く、日本が没落するであろうことは言うまでもない。私はこういう方法にのっとって、没落を予言したのである。

「中略」部分には「人口の量的、質的構成」を詳細に述べている。結末は「人口史観・教育学・量的、質的構成の決定・経済の営み・日本が没落・没落を予言」と、筆者の主張は普遍性がある。1990年代末に50年後の日本を予測するという、大胆な試みでありながら緻密な論じ方である。これらの優れた論文では、著者の壮大な研究や豊富な経験が多いに関係している。

個々の生徒に独創的で、個性的な文章を書かせたいと願う国語科教員は多い。このような教員は型どおりで、枠にはまった文章は想像力の欠如と捉え、自由な発想に基づく文章を重視している。ところで、中学生の文章に個性を求めるのは高度な学習内容となる。生徒は基本的な構成が備えた文章を書くことができれば十分で、独自の表現は大学卒業後に身につければよいと考えている。

5 報告の文章とは何か

(1) 論理的文章の種類

論理的文章はおおよそ「記録・報告・説明・論説」の4種類に分類できる。記録・報告・説明・論説は次のように定義すると、国語科の学習指導の際、活用しやすい。

記録は、観察した事実を時間どおりに語句、文等で記述したものをいう。日記、日誌、観察記録、実験記録がそれである。

報告は、観察、記録等を組織的に組み立てて、新しい一連の現象、事象の意義を述べたものをいう。レポートともいう。自然科学の論文は全てこれで、自然科学の分野ごとに専門誌が存在して、文章の形式が厳格に決められている。共通している形式は「序論・具体的事例1・具体的事例2・具体的事例3……考察」である。事実の記述は文章、写真、スケッチ等がある。新事実の発見報告が最も尊重される。新事実の発見を「追試・確認」した報告も尊重される。

説明は、新製品、新機能をだれにも分かりやすく記述した文章等で、プレゼンテーションといわれることもある。「序論・具体的事例1・具体的事例2・具体的事例3……考察」の形式が多い。

論説は、記録、報告による事実を数多く記述して、その要約の後に筆者の主張を述べたもので、新聞社の社説、月刊雑誌の論説記事、経済学、教育学、社会学等の論文等がそれである。「序論・具体的事例1・具体的事例2・具体的事例3……考察・結論」の形式が多い。

(2) 報告の文章の成立

森岡健二(1963)の報告の文章成立への言及は、示唆に富んでいる。森岡はコンポジションに関するアメリカの教科書を検討し、「調査報告」を次のように説明している¹⁵⁾。

……レトリック時代には「記述文」「叙事文」「説明文」「論証文」の四形式がたてられ、コンポジションの大系が確立して以後は「調査報告」が必ず置かれて他の諸形式は必要に応じて適宜取り上げられている(中略)基礎編の各段階を個々に学習した大学生が、コンポジションの総合的な実習を行なう最適のコースとして課されていると解釈される。

森岡は1940年以降、「コンポジションの基礎体系が非常に明確な形をとるように」なり、「調査報告」は必ずコンポジションに関するアメリカの教科書に置かれたという。このことは帰納論理によって、事実を基に主張の正当性を証明しようとする意識が鮮明になってきたと説明することができ、アメリカの教育の実態によく当てはまる。

森岡の考察の先進性を認め、中・高校生の報告の文章を、筆者（生徒）の考えを基に事実を複数取り出して考察を導く文章として、学校教育に位置づけることを提案する。

(3) 報告の文章例

ここでは、報告の文章の変遷を概観する。

① 現地報告

『世界をゆるがした十日間』は現地報告の古典といわれている。著者のジョン・リード（1887～1920年）は「私自身が観察経験した諸事件と、信頼できる証拠にもとづく諸事件との記録にとどめ、十一月革命の背景と原因をかんたんに輪郭づけた二つの章を、その前に附けるにとどめられなければならない」と述べている。1917年11月13日（西暦）の「スモーリヌイ」⁽¹⁶⁾（革命政府の本部が置かれた修道院）の様子を次のように描いている。

朝早く私はスモーリヌイへ出かけた。外門からの長い木造歩道をあゆみながら、私は、風のない灰色の空からひらひらと舞いおちる、ためらうような、うすい最初の雪片を認めた。「雪だ!」と玄関のところにいた兵士が、よろこんでニヤリとしながら叫んだ。「身体のためにいぞ!」建物内では、長い陰気なホールや荒涼とした室々に、人の気配がないようであった。巨大な大建築物のなかで動いているものは一人もなかった。太低い、気にかかるような物音がきこえるので、あたりを見廻すと、いたる所の床の上に、壁にそうて、人々が眠りこけているのが目についた。粗野な、汚らしい人々、労働者や兵士たちが、跳ねかえりでこびりついた泥をつけたまま、死人のような無頓着の態度で、独り寝そべったり、折重なって寝たりしていた。ある者は血痕のついたボロボロの繃帯をまいていた。銃や弾薬帯があたりに散らかっていた。……勝利を得たプロレタリアの軍隊!

階上の食堂では、かれらは足の踏み場もないほどに群がり寝ていた。空気は濁っていた。曇った窓から青白い光がながれこんだ。(後略)

ジョン・リードは「勝利」二日目の革命本部を上記のように描いている。引用は状況をありのままに客観的な事実として報告するというよりは、筆者の高揚感ととれる文言が入るなど、心象風景を描いたといえる。ルポルタージュが記録文学といわれるように、文学的文章の要素が多分にみられる。

② 「リットン報告書」

世界的に有名な報告の文章として、満州事変に関する現地調査委員会である「リットン調査団」が作成した、いわゆる「リットン報告書」を挙げる。外務省外交史料Q & Aでは「報告書は、日中

間の紛争解決のためには、1931年9月（柳条湖事件）前の状態への復帰は問題とならず、現制度により進展させるべきと指摘し、事態解決の原則及び条件として、日中双方の利益と両立することや満州における日本の利益の承認、日中間の新たな条約関係の設定など10項目を明示」していると述べている。

日本、中国の両者からの聞き取りを正確に記録し、記録に基づく調査団の意見とし「両者の意見が矛盾しているのは明らかだが、この間の事情を考えれば別に異とするには足りない。事件直前の不安な状態や興奮を考え、また利害を異にする関係者がとくに夜間起った事件に関して行った陳述には必ず相違するところがあるはずだからだ」¹⁰⁷と記している。客観的な事実に基づく新しい見方を提示している。

③ 取材によるレポート

立花隆（1982）は膨大な取材から得たデータの分析に基づいて、社会問題を実証的に論じている。立花自身が『田中角栄研究全記録（下）』を「主としてロッキード事件関連のレポートからなっている」と論じたように、立花の著述は豊富な事実と考察から構成されている¹⁰⁸。「田中角栄研究－その金脈と人脈」で、次のように述べている。

オモテの動きだけで、合理的説明が不可能なものには、それを補完する動きがウラになければならない。当然ながら、お金の動きも政治の動きも、その例にもれない。

そして、私たちはオモテ側からだけでは、合理的説明が不可能な現象を次々と見てきた。田中氏のユーレイ会社連続設立がそれである。田中氏の日本電建食いつぶし経営がそうである。小佐野氏のボロ会社（食いつぶされた日本電建）破格値買いがそうである。小佐野氏への外国為替審議会ギリギリ認可がそうである。小佐野氏の国有地払い下げによる巨額の利益がそうである。

これら一連のできごととは、田中氏の巨大なウラの世界を、はしなくもかいま見させてくれたできごとの一例ということができよう。

「田中氏のユーレイ会社連続設立……小佐野氏の国有地払い下げによる巨額の利益」という五つの具体的事例について、政治資金関係資料等の官公庁での筆記、登記所からの謄本の取り寄せ、直接のインタビュー、電話連絡等に基づいて詳細に論じている。これらの事例に対して「オモテの動きだけで、合理的説明が不可能なものには、それを補完する動きがウラになければならない」という知見を考察として述べている。

立花が「田中角栄研究－その金脈と人脈」を「こんどの記事を作れたのは最終的にはファクト（事実）とロジック（論理）だと思う」¹⁰⁹というように、詳細かつ豊富な具体的事例と考察とが帰納的に結びついた構成である。

④ 自然科学の論文

19世紀以降の市民革命や産業革命等により、19世紀から20世紀にかけては大きな社会的変動があり、新しい現象を文字として残しておく事実の記録や報告に対する必要性が高まった時期でもある。報告の文章の典型は自然科学の論文にみることができる。

西澤潤一は、松尾義之(2015)によれば「四〇年以上も科学ジャーナリズムの世界で生きてきて、西澤潤一博士のように一人で多くの卓越した業績をあげた科学者を見たことがない」とし、「人類が開発した九九%以上の効率を持つ変換装置三つのうち、二つまでを西澤博士が実現した」²⁰⁾と評している。

次に、西澤潤一(1986)の「静電誘導トランジスタ」²¹⁾を引用する。

(前略)最近“第3のトランジスタ”と呼ばれるものが注目を集めてきた。それが私の発明した“静電誘導トランジスタ (英名Static Induction Transistor, SIT)”である。(中略)

pinダイオードの発明

SITの基本構想が浮かんだのは1951年のことだった。(中略) pinダイオードは、高い交流電圧をも高効率で直流に直すことのできるデバイスとして、電気工学の分野で革命を引き起こした。それまで青白い光を出して働いていた水銀放電管は、電気化学工場や映画館の映写室からほとんど姿を消してしまった。(中略)

静電誘導トランジスタ (小見出しのみ、文章省略)

SITと従来のトランジスタの比較 (小見出しのみ、文章省略)

集積回路用のデバイス (小見出しのみ、文章省略)

MOS型のSIT (小見出しのみ、文章省略)

静電誘導サイリスタ (小見出しのみ、文章省略)

静電誘導サイリスタの応用分野 (小見出しのみ、文章省略)

SITファミリー

静電誘導トランジスタ (SIT)、静電誘導サイリスタを中心とするSITファミリーは、日本で生まれ育った新分野である。これらはすべて低雑音デバイスという特徴をもち、集積回路用高速素子から超高感度撮像素子、そして電力用エレクトロニクス機器にいたるまで、現代社会のさまざまな場面に登場しつつある。(後略)

引用の論文は9の章で構成し、第一の章に概要、第二から第八の章に具体的事例、第九の章に考察を記述している。第三から第八の章は小見出しのみを取り出し、文章を省略している。

第二から第九の章の小見出しは、その章のキーワードの役割を担っている。具体的事例を書いた章のキーワードと、考察の「すべて低雑音デバイスという特徴をもち」「現代社会のさまざまな場面に登場しつつある」とはよく結びつき、帰納論理の思考で文章が展開している。

ここまで述べたように、報告の文章が1940年以降、その意義が認められ、文種として定着している。事実に基づいて主張の正当性を証明しようとする帰納論理の意識が明確になった表れである。報告の文章は事実の記録を基に新しい見方を社会に示した文章でもある。

6 報告の文章の学習指導の一案

ここまで述べてきたように、社会生活に不可欠な報告の文章を書く学習では、小・中・高等学校と継続して、系統的な指導が必要である。それは、日常という現実を対象に、筆者（児童生徒）の考えに基づき複数の事実を取り出し、事実から考察や結論を書くという学習である。

報告の文章のテーマとして、「家の手伝い、当番活動、運動会、宿泊行事、一年間の思い出」は毎年、繰り返し書かせる。同様のテーマで書くと、子どもは飽きるのでないかという懸念の声を聞くことがある。ところが、実際は逆で、子どもは学年が進行すると、思考が緻密になり、経験と言葉とが的確に結びついて、次第に詳細に書くことができるようになる。このことを子ども自身が実感するためか、書く活動に意欲的になる。

中・高等学校6年の報告の学習指導の目標とその計画等を、次のように設定している。2018年度から中学校2校で実践している。

(1) 単元名「報告の文章を書く」

(2) 単元の学習目標

- ① 報告の文章構成を知る。
- ② 各段落が固有の役割をもつことを知る。
- ③ 各段落の役割に適した文章を書く。

(3) 単元の学習計画（4時間扱い）

- | | |
|-----|---|
| 第1時 | 1 報告の書き方プリントを読む。 |
| | 2 テーマについて構想をもち、書き方ワークに「考察・具体的事例1・2」のキーワードを書く。 |
| | 3 黒板で添削され、評価を受ける。(板書添削) |
| 第2時 | 4 キーワード表から「具体的事例1・2・考察」を各1行の文（一次原稿）で書く。 |
| | 5 黒板で添削され、評価を受ける。(板書添削) |
| 第3時 | 6 推敲プリントを通して、推敲・評価の観点を知る。 |
| | 7 少し詳しい報告の文章（二次原稿）を書く。 |
| | 8 黒板で添削され、評価を受ける。(板書添削) |
| | 9 書き方ワーク・一次原稿・二次原稿を教師に提出する。 |
| 第4時 | 10 報告の文章の音読（教師）を聞き、その評価を話し合う。(評価の授業) |
| | 11 各々の報告の文章が返却される。 |

7 報告の文章指導の実際—公立中学校1、2年

(1) 中学1年の報告の文章を書く学習計画

公立A中学校では、2018年度の中学1年の報告の文章のテーマを次のように計画した。

- | | |
|--------------------|--------------|
| 1学期 第1单元「家の手伝い」 | 第2单元「炊事学習」 |
| 2学期 第3单元「班・係活動」 | 第4单元「二学期の行事」 |
| 3学期 第5单元「中学一年の思い出」 | |

A中学校の授業者は次のような点から計画したという。

- ① 中学に入学したての生徒は、自分の体験を書く際に、小学校での指導が行き届いているためか、そのつど感想を交えながら敬体で書く習慣がついている。
- ② テーマを伝えても、何を書けば分からないという生徒が多い。
- ③ 中学1年では論理的文章を書く力を身につける取り組みとして、5学級全てで年5回、報告の文章を書く指導の時間を設定した。
- ④ 身近なテーマについて、「序論・具体的事例1・2・考察」の形式で400字程度の文章を書く活動とした。
- ⑤ 2・3年で論説を扱う時期には「考察」の後に「結論」を加えるが、1年では「考察」までの記述とした。事実と感想・意見を分けることを改めて学んだ生徒が、主張との違いに戸惑い混乱することを避けるためである。

(2) 中学1年での授業者の成果と課題

2018年度を終えて、授業者は以下のような成果と課題を挙げている。

成果：① A評価の生徒は第1单元から第5单元まで7%、12%、8%、18%、28%で、全学級とも第5单元のA評価が最も多かった。

② 他教科のレポートや総合的な学習の時間の発表等、他の書く活動で学習の成果を実感できたという感想が多く見られた。

③ 多くの場面で「序論・具体的事例・考察」という形式が生かせるということに気づき、実践している生徒がいることが分かった。

課題：① 「詳細に書く技術を身につける」ことや、「事実と感想を確実に分ける」こと等の課題が明らかになった。

② 事実と感想について、「『みんなで協力した』は感想になるか」、「『盛り上がって大成功だった』ことを事実として表現するにはどうしたらいいのか」等の質問がよくあった。

(3) 中学2年の報告の文章を書く学習計画

A中学校では、2019年度の中学2年の報告の文章のテーマを次のように立てた。

- 1 学期 第1単元「家の手伝い」
- 2 学期 第2単元「宿泊行事での成果」 第3単元「二学期の行事」
- 3 学期 第4単元「中学二年の思い出」

(4) 中学2年での授業者の回答

2020年3月、稿者が授業者に次の2点を質問した。

第一が、中学1年と比べて書き方に変容はあったか。

第二が、中学1年から2年にかけて、論理的表現力は伸長したか。

第一の質問「中学1年と比べて書き方に変容はあったか」への回答は次のとおりである。

- ① 具体的事例に感想を書かないという意識が強くなった。
- ② 書きながら「『○○した』は感想になってしまいますか」という質問をする生徒が多く、質問と回答の積み重ねで上達してきている。
- ③ 日時、数量等の数字を頻繁に使うようになった。具体的に事実を書く方法として分かりやすいと理解されている。
- ④ 具体的事例を書くとき、感想になりそうなことをどう書き換えればよいか分かってきた。
 - 例1 勉強を頑張った。→ 一日三時間勉強した。
 - 例2 上手くいった。→ 「上手だね」と言われた。
- ⑤ 事実の羅列だけではなく、中心となる事柄を詳しく書こうとしている。「場面の中心を決めて、中心を詳しく書く」という学習項目を、特に4回目の「中学二年の思い出」で重点的に指導した。事実の羅列になるところを、「考察」に書いた感想と合致する部分を詳しく書くように意識させた。その結果、考察が「協力した」であれば、具体的事例は行事でも特に協力した場面を書く、ということができた生徒が複数いた。
- ⑥ 書くことが速くなった。同じ方法を繰り返すことで手順が身につく、時間内に字数を満たすことはほぼ全員ができるようになっている。

第二の質問「中学1年から2年にかけて、論理的表現力は伸長したか」は、生徒アンケートから抜粋し、以下に示す。

- ① 伝えたいことを順序よく話せるようになった。
- ② 学校内の委員会活動の説明で生かした。
- ③ 小論文は、理科のレポート等事実しか書かないものを書くときに役立っている。
- ④ 社会科の歴史上の人物紹介で役に立った。
- ⑤ 行事の振り返り作文や総合的な学習の時間のまとめの学習等で、小論文の構成を使って文章を組み立てた。

- ⑥ 文章の構成力がつき、何がしたいのかを分かりやすく提示できるようになった。
- ⑦ 国語のパネルディスカッションの原稿で、自分の立場をはっきりさせ、その理由を例を挙げて具体的に詳しく書けた。

8 生徒の報告の文章の移り変わり

一人の生徒（生徒Aとする）の報告の文章の移り変わりを検討する。生徒Aは中学1年で論理的文章の書き方を回を追うごとに身につけて、作品を仕上げるようになっている。このような着実な伸張は、指導経験上、中学1年によくみられる傾向であったため、取り上げることとした。

(1) 生徒Aの2年間の文章評価

生徒Aの2年間の文章評価は次のとおりである。

単元	1	2	3	4	5
中学1年の評価	B	B	B	B	A
中学2年の評価	B	B	B	B	／

(2) 生徒Aの中学1年の報告の文章

次に、生徒Aの1年の第1・3・5単元の報告の文章を挙げる。

第1単元 題名「つらい手伝い」(B評価)

僕は、つらい家の手伝いをしている。

(序論)

僕は、母が不在のとき、皿洗いをした。兄は母が作った料理を兄は食べて皿を片付けたが皿を洗わず放置しているから、しかたなく皿を洗った。大きい皿から小さい皿までていねいに洗った。兄は、また皿をふやした。今度はコップ一個だったから、ていねいにすみずみまで洗った。(具体的事例1)

僕は、荷物の手伝いをしている。これは、親がついて来いと言ったからついていった。重い荷物から軽い荷物までは幅広く対応した。両手がふさがっていて、お母さんが「トレーニング」と言っていた。とても時間がかかっ

第3単元 題名「清掃と教科連絡」(B評価)

僕は、係活動とそうじをしている。(序論)

教科連絡を先生に聞きに行っている。学習係に所属している。主に英語の時間に聞きに行っている。授業の終わりに教科担任の先生に聞いていて、昼休みに聞きに行った内容をホワイトボードに書いている。時々、音楽の教科連絡の人が休んでいたら、音楽の先生にも聞きに行っている。(具体的事例1)

教室清掃を班のみんなでしている。自分は五班にいる。清掃では自分はゴミ捨てに行ったり、ほうきでゴミをはいたりしている。時間は分からないが、放送が終わるまでには終わっていることが多い。五班ではちりとりを誰がやるかとか、ゴミ捨てを誰がやるかとか

た。両手のトレーニングもどうにか無事に終わった。
(具体的事例2)

どちらも時間がかかってつらかった。でも
けい続していきたい。(考察)

(第1単元の考察)

- ① 序論の書き方や、原稿用紙の使い方等の理解が不十分である。
- ② 具体的事例に不正確な所があり、中心となる事柄が分かりにくい。

が多い。(具体的事例2)

みんながんばっているのががんばりたい。
やらなくてもいいならやらないが、学校のき
まりなのでがんばっている。(考察)

(第3単元の考察)

- ① 具体的事例1を正確に書けるようになった。
- ② 具体的事例2も感想・意見を書かないように努めているが、分かりにくい箇所がある。

第5単元 題名「試合と昼休み」(A評価)

この一年で色々な経験をしている。(序論)
バレー部の試合が冬休みにあった。自分は
人数合わせでS中の試合に出た。自分はまだ
ローテーションが分かっていなかったでS
中のキャプテンに教えてもらいながらやっ
ていた。サーブの出番が回ってきて、サービ
スエースが決まった。その後も試合は続い
て二十五対十八くらいで勝った。(具体的事例1)

昼休みにしゃべったり遊んだりしている。
昼休み体育館が使えるときは、バスケット
ボールやバレーボールをしている。主にバス
ケットボールでは試合をし、バレーボール
ではレシーブをしている。使えないときは
教室でくだらない話をしている。ときど
き山田君とサッカーの話をする。
(具体的事例2)

どちらも楽しかった。試合にまた出たり
昼休みにしゃべったり遊びたい。(考察)

(第5単元の考察)

- ① 文法の誤りは見られるものの、原稿用紙を正確に使えるようになった。
- ② 各段落の役割とその関係を理解できつつある。
- ③ 事例の記述が具体的になり、感想や意見がなくなった。

(3) 生徒Aの中学2年の報告の文章

次に、生徒Aの2年の第1・3単元の報告の文章を挙げる。

第1単元 題名「大変な手伝い」(B評価)

僕は、家の手伝いをしている。(序論)
僕は皿洗いをしている。特に、昼ご飯のと

第3単元 題名「二学期の二つの行事」(B評価)

二学期にいろいろな行事を体験した。
(序論)

きや、夜おそく親がいないときに、兄たちと分担してお皿を洗っている。お皿がかわいたら、これも兄たちとお皿をたなにしまっている。家にはルールがあり、自分で使った皿は自分で片付ける。自分の分は自分で片付けている。
(具体的事例1)

雪がつもったとき、雪かきをしている。特に家の前の道をしている。吹雪いて寒いときも、雪が積もったら行っている。極稀に兄が雪かきをしてくれるが、基本は自分がしている。兄も一緒に行うときは、主に次男と一緒に雪かきをする。テンポがよくて、十分間くらいで終わる。
(具体的事例2)

どちらも大変で疲れる。でも家のためになるから行く。
(考察)

(第1単元の考察)

- ① 序論、具体的事例1・2・考察という構成を理解し、書いている。
- ② 具体的事例で「特に」と記述し、時間や場所、場面を決めて詳しく書こうとしている。

九月二十七日に学校祭があった。ステージ発表では、合計四つのクラスが発表した。特に、三年一組は歓声が上がった。バザーの後の教室発表を回る時間では、いろいろなクラスを回れた。遊べる場所もあったし、クラスの中が光っているクラスもあったし、音楽が流れているクラスもあった。

(具体的事例1)

十月二日に陸上体育大会があった。気温は高く、雲一つない快晴だった。自分はハンドボール投げに出場した。一投目に投げたボールが三十三メートルを超えた。だけど、その後一組の人が投げたボールが、自分の記録を超えてしまった。優勝まで後一歩だったが、準優勝になった。
(具体的事例2)

どちらも楽しかった。来年も楽しく参加したいと思った。
(考察)

(第3単元の考察)

- ① 序論の「いろいろな行事」が、曖昧な書き方である。
- ② 具体的事例1はステージや教室発表と、見た事柄の順で書いているため、漫然としている。

(4) 生徒Aの文章の移り変わり

- ① 第1単元「家の手伝い」の2年では、文章構成を理解し、その定着がみられる。
- ② 第1単元の2年の具体的事例2で、「家の前の道」の「雪かき」を詳しく書こうとしている。同単元の1年の「荷物の手伝い」と比べると、一つの場面を決めて書いている。ここでは、雪かきを「テンポ」よく行うことを具体的に書くときよかった。
- ③ 第3単元「二学期の行事」の2年の作品は、1年の評価基準であれば、「A評価」である。これは学年の進行によって、授業者の文章評価の観点が変化し、より高度な評価基準を設定しているためである。
- ④ 第3単元「二学期の行事」の2年の具体的事例1で、「ステージ発表」と「教室発表」という二つの事柄を記述している。第5単元「中学一年の思い出」では「バスケットボール・

バレーボール・くだらない話・サッカーの話」と、昼休みの出来事をいくつも挙げているが、「A評価」である。ここから授業者の文章評価が変化したとみることができ、学年が進行したことで、評価基準を上げている。

- ⑤ 第3単元「二学期の行事」の2年の具体的事例2では、「一組の人が投げたボールが、自分の記録を超えてしまった」という記述がある。心情を書かず、そのときの状況が他者によく伝わる書き方になっていてよい。

9 報告の文章指導の概要－私立中学校

私立B中学校では、2018、2019年度の2年間、報告の文章を中心とした年間計画を次のように立てている。国語科授業から週に1時間を「論理の時間」として独立させ設定し、全学年を一人の教員が担当している。2020年度はオンライン授業を取り入れながら、この年間計画を継続していると聞いている。

1学期 第1単元「家の手伝い」 第2単元「体育祭」

2学期 第2単元「文化祭」 第3単元「係活動」

3学期 第4単元「一年間の思い出」

授業者は成果が上がった学習は、次の2点であると指摘している。

- ① 第1～3時の「黒板で添削され、評価を受ける」学習
- ② 第4時の「評価の授業」

これらの学習は自分より少し上手い生徒作品を黒板を使って見聞きしたり、授業者の読み聞かせを音声で確認したりする。このことで文章評価の観点を、学級全体で共通理解していると言う。

2018年11月実施の文章読解・作成能力検定（日本漢字能力検定協会）で、B中学校は受検生2、3年110名中89名（81％）が合格した。意見文を書く第五問で64名（58％）が60点満点中50点以上である。平均点が45点で中央値が50点のため、高得点層に半数以上が集まっている。「論理の時間」の学習の成果と考えることができる。B中学校の生徒作品の移り変わりは、別の機会に報告したい。

10 まとめ

本稿は中学国語科の報告の文章評価の学年進行における観点の変化について、中学校での授業報告に基づき考察した。一事項の詳細な書き方、性質の異なる具体的事例の選び方、具体的事例の抽象度の幅、個性的な考察の書き方、以上4点が、文章評価の学年進行における観点の変化と想定している。これらを重点に置いた学習を指導することで、生徒の論理的文章を読む力・書く力の向上に繋がると考えている。今後、高等学校国語科で検証授業を進め、報告を書く学習の指導における重点項目を明らかにしていく。

「注」

- 1、長谷川祥子（2019）「中・高等学校国語科における論理的表現力を育成する教材の開発」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第10号、1-17.
- 2、新井紀子（2018）『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社、185-188）、稿者のまとめによる。
- 3、渡辺一衛（1995）「帰納」の項目『新版 哲学・論理用語辞典』三一書房、124.
- 4、柳父章（2004）『近代日本語の思想』法政大学出版局、40.
- 5、今野真二（2015）『図説 日本語の歴史』河出書房新社、155.
- 6、森鷗外「高瀬舟」『鷗外全集 第十六巻』岩波書店、1973年、223、以下、旧字体を新字体に直す。
- 7、今野真二（2015）『図説 日本語の歴史』前出、157.
- 8、『衛生新篇』の第一版は1897（明治30）年、第五版が1914（大正3）年に出版されている。引用は『鷗外全集 第三十一巻』岩波書店、1974年、562-569、以下、傍線は稿者による。
- 9、石田頼房（1999）『森鷗外の都市論とその時代』日本経済評論社、2.
- 10、『文学評論』は1909（明治42）年に春陽堂から出版されている。1905（明治38）年9月から1907（明治40）年3月までの大学の講義「十八世紀英文学」に訂正を加えたものである。引用は『漱石全集 第十九巻』岩波書店、1957年、275-278.
- 11、「坊っちゃん」は1906（明治39）年『ホトトギス』に発表、引用は『漱石全集 第三巻』岩波書店、1956年、309.
- 12、寺田寅彦「地球の剛性に関する学説」『寺田寅彦全集 第十四巻』岩波書店、1998年、111-115、初出は『現代之科学』1913（大正2）年4月.
- 13、丸山真男（1961）『日本の思想』岩波新書、176-182.
- 14、森嶋通夫（2010）『なぜ日本は没落するか』岩波現代文庫、3-7.
- 15、森岡健二（1963）『文章構成法』（至文堂、387-395）から一部、省略している。
- 16、ジョン・リード著、原光雄訳（1957）『世界をゆるがした十日間（下）』岩波文庫、51-52.
- 17、渡部昇一（2014）『全文 リットン報告書（新装版）』ビジネス社、185.
- 18、立花隆（1982）「田中角栄研究－その金脈と人脈」『田中角栄研究全記録（上）』講談社文庫、88、初出は『文藝春秋』1974年11月号.
- 19、立花隆（1982）「事実と論理だけでつくったぼくの『角栄研究』」前掲同書、125、初出は（イーデス・ハンソン対談）『週刊文春』1974年11月25日号.
- 20、松尾義之（2015）『日本語の科学が世界を変える』筑摩選書、161-165.
- 21、西澤潤一（1986）「静電誘導トランジスタ」『別冊サイエンス 先見の科学技術』日経サイエンス、110-122、初出は『サイエンス』1983年2月号.